

協会だより



一般社団法人 関東地域づくり協会

3

関東地域づくり協会からのお知らせ

令和元年度関東ブロック 災害復旧事業技術講習会を開催
 関東地方防災エキスパート情報交換会が開催されました
 地域づくり研究所活動報告
 令和元年度「先生のための防災学習支援講座」を開催

4

関東地方整備局に関する話題

令和元年 台風第19号への対応

6

プロジェクトK³⁸

地域の人々の理解を得て
 実現した大規模な多目的ダム
 川治ダム

10

関東の宿場町①

日本橋 東京都

12

関東の土木遺産³⁸

元町・山手地区の震災復興施設群 神奈川県

14

会員のひろば

ラグビーフットボールとの出会い

15

会員情報

お悔やみ
 神奈川支部移転のお知らせ
 編集委員会だより

16

ピックアップ 関東の「道の駅」⑯

地域の人々が集い
 生き生きと活動する場に
 道の駅「両神温泉薬師の湯」

**表紙の言葉**

こすげなつき
 小菅夏希さん（茨城県下妻市立東部中学校）

梨収穫の帰り道

この写真は当協会が主催する第31回「道のある風景写真コンクール」で中学校の部銀賞に選ばれた下妻市立東部中学校の小菅夏希さんの作品です。「祖父が育てた梨の収穫を手伝いました。祖父と妹が楽しく話をしている後ろ姿がとても微笑ましくほのぼのとしているので、写したいと思い撮りました。梨畑から家までは約500メートルなので、耕運機の速さだと5分くらいの道のりです。ここを耕運機に梨を載せ、のんびりした速さで進みます。祖父のおいしい梨をこれからも食べられたらいいなと思います。そして、大好きな祖父が、いつまでもずっと元気でいたらいいいなと思います」。梨を車に載せ家路につく二人の楽しそうな後ろ姿に、満足感があふれています。

令和元年度関東ブロック 災害復旧事業技術講習会を開催

7月25日（木）、当協会および公益財団法人群馬県建設技術センター等との共催により、東京都荒川区の日暮里サニーホールにおいて「災害復旧事業技術講習会」を開催しました。本講習会は、関東地方で災害復旧業務に携わる関係者を対象として、平成17年度から実施しています。

今回は310名の方が受講し、災害復旧事業制度や留意事項など講師の話に真剣に耳を傾けていました。

講師を務めていただいた佐藤睦雄氏は9月2日逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。



講師を務めていただいた
佐藤睦雄氏



■ 講義内容

「災害復旧事業制度について」

丸山準氏（国土交通省水管理・国土保全局防災課総括災害査定官）

「災害復旧事業の基本原則」

加藤孝氏（国土交通省水管理・国土保全局防災課災害査定官）

「災害復旧事業における留意事項」

佐藤睦雄氏（（公社）全国防災協会災害復旧技術専門家）

「群馬県における災害復旧事業に係る対応力向上のための取組について」

田口哲也氏（群馬県県土整備部河川課水害対策室防災係主任）

「関東地方整備局の災害対応について」

田中満氏（国土交通省関東地方整備局災害対策マネジメント室長）

- 【共催】 一般社団法人関東地域づくり協会
公益財団法人群馬県建設技術センター
一般社団法人建設コンサルタンツ協会関東支部
一般社団法人全国測量設計業協会連合会
関東地区協議会・東京地区協議会
一般社団法人関東地質調査業協会
- 【後援】 国土交通省関東地方整備局
群馬県
公益社団法人全国防災協会

関東地方防災エキスパート情報交換会が開催されました

関東地方防災エキスパートは、関東地方において地震および風水害等の大規模災害発生時または発生の恐れがある場合に、専門的知識と経験を生かして公共土木施設等の被災状況の迅速な収集と通報および災害対応等に関する支援活動をボランティアとして行っています。

防災エキスパートの活動を効果的に行うため、毎年7～8月頃に関東地方整備局の各事務所主催による情報交換会が実施されています。今年度は6月21日から8月8日までに34事務所で情報交換会が開催され、9支部の合計で327名の防災エキスパートが参加しました。



利根川上流河川事務所との情報交換会

支部名	主催事務所	開催日
水戸支部	常陸河川国道	7月18日(木)
	下館河川	7月31日(水)
	霞ヶ浦導水	7月25日(木)
	常総国道	7月 5日(金)
宇都宮支部	常陸海浜公園	6月21日(金)
	宇都宮国道	7月 5日(金)
	日光砂防	7月12日(金)
	渡良瀬川	8月 8日(木)
高崎支部	鬼怒川ダム統合	7月10日(水)
	高崎河川国道	7月24日(水)
	利根川水系砂防	7月25日(木)
	ハツ場ダム/品木ダム	7月26日(金)
大宮支部	利根川ダム統合	7月31日(水)
	利根川上流	7月19日(金)
	荒川上流	7月16日(火)
	大宮国道	8月 8日(木)
千葉支部	北首都国道	7月30日(火)
	荒川下流	7月29日(月)
	霞ヶ浦河川	7月23日(火)
	利根川下流	7月31日(水)
東京支部	江戸川河川	7月30日(火)
	首都国道	7月18日(木)
	千葉国道	7月29日(月)
	関東技術	7月17日(水)
神奈川支部	東京国道	8月 7日(水)
	相武国道	7月17日(水)
	昭和記念公園	7月19日(金)
	京浜河川	7月23日(火)
甲府支部	相模川水系ダム	7月11日(木)
	川崎国道	7月25日(木)
	横浜国道	7月12日(金)
	甲府河川国道	7月29日(月)
長野支部	富士川砂防	7月26日(金)
	長野国道	7月 8日(月)

地域づくり研究所活動報告

令和元年度「先生のための防災学習支援講座」を開催

当協会の「地域づくり研究所」は、地域の人々を対象とした防災や社会資本に関する啓発活動や、防災体験学習施設に来館する小中学生を対象とした防災講座等の活動を行っています。

新たな教育指導要綱で一段と重要視される防災学習の指導効果を高めることを目的に、小中学校の教員等を対象とした防災学習支援講座を一昨年度から実施しています。今年度は7月31日（水）に、国土交通省東京国道事務所および東急建設株の協力をいただき、駅周辺の改良や再開発が行われている渋谷にて開催し、11名（小学校教員7名、中学校教員2名、教育委員会1名、大学1名）が参加しました。

参加者からは、「フィールドワークの大切さについて改めて実感することができた」「都市や国土の環境の成り立ちが理解できた」「地図は防災教育に欠かせないものだと感じた」「普段見られない地下の工事現場を見ることができ貴重な体験だった」などの感想が寄せられました。来年度も地域づくり研究所の活動の一環として、この講座を続けていく予定です。

■講座会場

アットビジネスセンター渋谷駅東口402号室

■プログラム

10:00	開講、あいさつ、インフォメーション 堤盛良(関東地域づくり協会 地域づくり研究所長)
10:05	講座1「学校で進める国土づくり、防災の授業」 寺本潔氏(玉川大学教育学部教授) 児童・生徒の主体的で深い学びにいざなう、多様なアクティブラーニングの指導方法を紹介するとともに、道路、橋、水門、堤防など地域の土木建造物の役割について学ぶ
11:35	講座2「首都直下地震に備える」 岡山和生氏(地域づくり研究所客員研究員) 首都直下大地震で何が起きるか、どんな対策がとられているか、どうやって身を守るかを学ぶ
13:00	講座3「国土強靱化を進める」 中島威夫氏(地域づくり研究所客員研究員) 防災・減災のために進められている対策、災害発生後まで見据えて粘り強い国土にする国土強靱化について学ぶ
13:40	現場見学1「国道246号渋谷駅周辺整備事業」 関根孝之氏(国土交通省関東地方整備局東京国道事務所計画課事業対策官)
14:45	現場見学2「渋谷駅東口基盤整備工事」 浦部克人氏(東急・清水・鹿島建設共同企業体渋谷駅東口基盤整備工事事務所担当所長)
16:00	閉講



寺本先生の講座の様子
身体でアーチを作り強さを知る



現場見学1 国道246号下の
渋谷駅東口地下歩道



岡山客員研究員の講座



中島客員研究員の講座

関東地方整備局に関する話題

令和元年 台風第19号への対応

那珂川など直轄区間4河川で堤防が決壊

台風第19号は10月12日（土）19時前に大型で強い勢力で伊豆半島に上陸した後、関東地方を通過し、13日未明に東北地方の東海上に抜けました。台風本体の発達した雨雲や台風周辺の湿った大気の影響で、静岡県や関東甲信地方、東北地方を中心に広い範囲で記録的な大雨とな

り、10日からの総雨量は神奈川県箱根町で1000ミリに達し、関東甲信地方と静岡県の17地点で500ミリを越えました。関東地方整備局管内では、多くの雨量観測地点で既往最大雨量となり、多くの水位観測地点で既往最高水位を記録しました。

関東地方整備局に関する話題

管内の直轄河川区間においては、4河川9箇所で堤防が決壊し、8河川16箇所で越水・溢水氾濫が発生しました。

直轄管理区間決壊箇所

水系	河川	地 先	位置
荒川	越辺川	埼玉県川越市平塚新田地先	右岸 0.0k
		埼玉県東松山市正代地先	左岸 7.6k
	都幾川	埼玉県東松山市早俣地先	右岸 0.4k
久慈川	久慈川	茨城県常陸大宮市富岡地先	左岸 25.5k
		茨城県常陸大宮市下町地先	右岸 25.5k
		茨城県常陸大宮市塩原地先	左岸 27.0k
那珂川	那珂川	茨城県那珂市下江戸地先	右岸 28.6k
		茨城県常陸大宮市野口地先	左岸 40.0k
		茨城県常陸大宮市下伊勢畑地先	右岸 41.2k



那珂川右岸28.6k被災状況(10/13 6:15頃)



那珂川右岸28.6k接続ブロック施工中(10/28 7:00頃)



荒川水系都幾川右岸0.4k被災状況(10/13 12:00頃)



荒川水系都幾川右岸0.4k大型連結ブロック施工完了(10/24 8:00頃)

決壊した9箇所では13日夕方～14日朝より緊急復旧工事に着手し、11月6日17時時点で7箇所の緊急復旧工事が完了しています。

関東地方整備局災害対策本部(風水害)は、10月10日10時55分に注意体制に入り、10月11日17時00分に局内支部で重大災害の発生の恐れがあるため、風水害対策本部を非常体制に移行しています。

災害対策本部は、被災を受けた管内の地方自治体へ多くのTEC-FORCEや排水ポンプ車等の災害対策車を派遣しています。また中部以西の整備局から多くのTEC-FORCEや排水ポンプ車が管内に派遣されています。11月4日15:00時点では、情報収集のためのリエゾン派遣が、のべ699人/日、被災状況調査等のためのTEC-FORCE派遣が、のべ1,263人/日となっています。

関東地方防災エキスパート事務局は、関東地方整備局災害対策本部からの出動要請を受け、防災エキスパートへ出動の打診を行い、のべ30人/日の防災エキスパートの方に出動していただきました。

大きな被害が出た河川もあった一方で、これまで整備を進めてきた治水施設が機能を発揮しています。鶴見川多目的遊水地は、約94万㎡の洪水を一時的に貯留しました。鶴見川多目的遊水地内にある横浜国際総合競技場(日産スタジアム)では、10月13日にワールドカップラグビー日本対スコットランド戦が無事開催されました。



[上]被災対応の助言
[左]他地整の
TEC-FORCEの案内

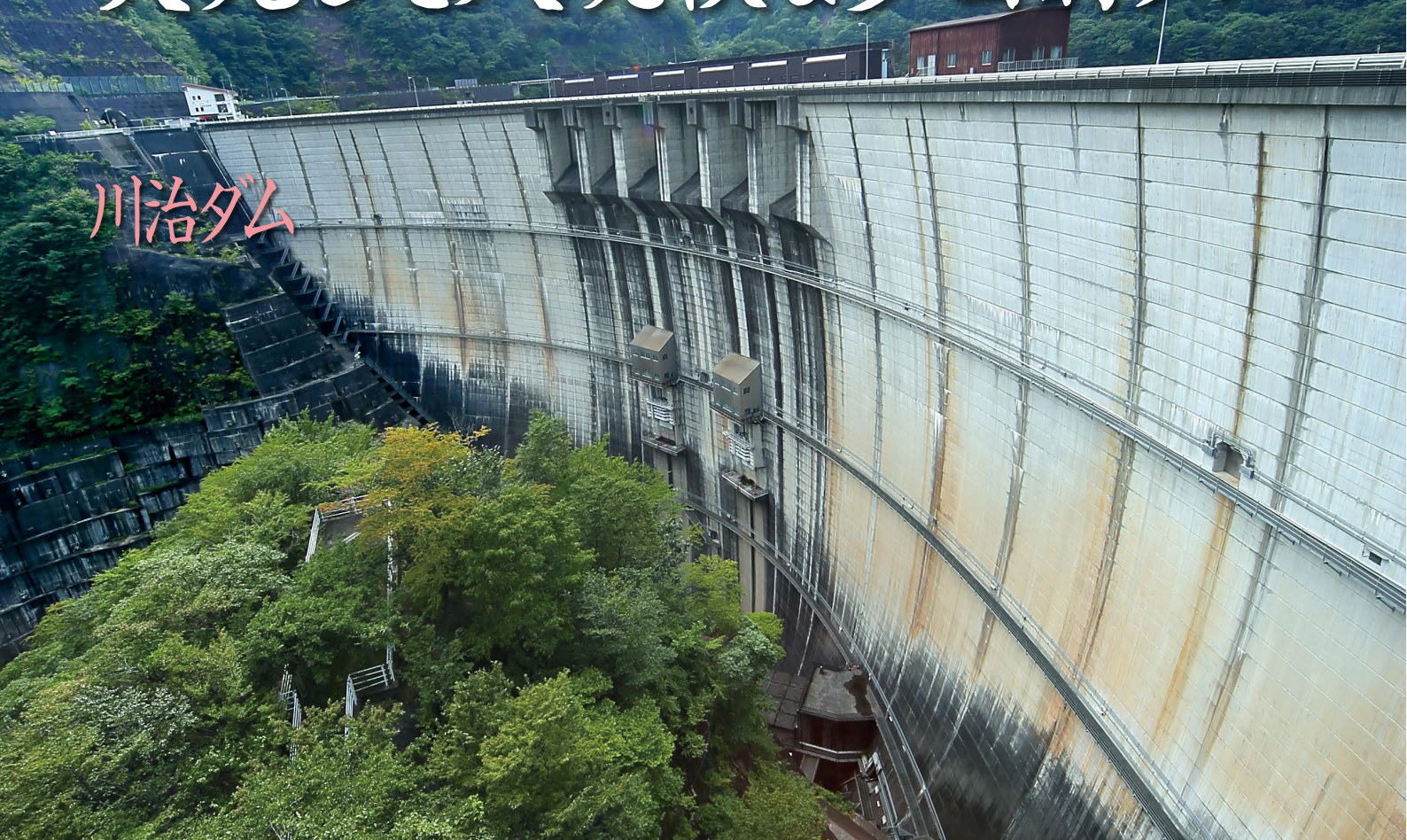


約94万㎡を貯留した
鶴見川多目的遊水地
(10/13 6:30頃)

記事・写真:関東地方整備局HPより(防災エキスパート活動状況除く)

地域の人々の理解を得て 実現した大規模な多目的ダム

川治ダム



会員の方々に携わったプロジェクトの地を再訪していただき、
苦勞や喜び、エピソードさらには事業全体の効果などを語っていただく本シリーズ。
今回は鬼怒川上流の川治ダムの建設に携わった吉永格文さん、
八木澤和人さん、佐藤郁太郎さんとともに現場を訪れました。



吉永格文さん

昭和34年4月入省、平成2年
4月退職。



八木澤和人さん

昭和46年4月入省、平成21年3月
退職。



佐藤郁太郎さん

伊田テクノス株式会社執行役員・
技術部長／昭和47年4月入省、平
成26年3月退職。



① ダム本体を見上げると、
一層スケール感が伝わってくる

② ダム完成、試験湛水時、
6門のクレストゲートからの放流



③ 川治ダム管理支所の敷地にある記念碑には、三人の名も刻まれている

ダム建設の知識と技術を培う 貴重な現場

昭和45（1970）年に洪水調節やかんがい用水・都市用水の供給を目的とした特定多目的ダムとして建設工事を開始した川治ダムは、昭和59（1984）年に竣工した。国内でも有数の、大規模なアーチ式コンクリートダムである。ダム堤体は高さ140m、堤頂長は320mに及ぶ。下流側からダム本体を見上げると、上部が大きくせり出し、左岸・右岸の地形に合わせて部分ごとに曲面が細かく調整されており、簡単な仕事ではなかったことをうかがわせる。

八木澤和人さんは技官として、昭和46年4月に川治ダム工事事務所に着任。それから本体のコンクリート打設が8割方進んだ昭和55年3月まで在籍した。「当時はまだ18歳で、初めての現場でした」と振り返る。

「調査設計課に3年、本体に着手してからは工事課に移り7年。地質調査や道路工事、本体掘削、本体コンクリート打設の工事監督などを経験しました。土木のこともダムのことも何も知らずに入ったのですが、その後の基礎

をここで築くことができました」

本体掘削と本体打設という工事の最盛期を経験できたのが一番の思い出だという八木澤さん。

「最初の掘削は高い山のてっぺんから。河床から見上げると250mくらいの高さがありました。最初から山の上には重機が入りませんから、人がつるはしとスコップで小さい平場を造って広げるのです。そこにクレーンを設置し、分解した重機を上げ、掘削した土砂をブルドーザーで川に落とす。法面を掘削し、モルタルを吹き付けて固めながら降りてくる。これにかなりの時間がかかりました」（八木澤さん）

八木澤さんと入れ替わりに工務課の技官として着任した佐藤郁太郎さんは、昭和55年4月から昭和57年4月まで在籍。

「私が着任したときは、かなり本体工事が進んだ段階でした。昭和55年に事業費改定があり、それに追われてとにかく忙しかった記憶があります。計画当初より物価が上がり、人件費や機械設備の費用なども上がっていましたから、どれがどのくらいの比率で上がっているのか、当初の予算と突き合わせて増額分を計算するのです。ま



④ 本体コンクリート打設完了を祝う技術者たち



⑤ ダム本体コンクリート打設建設中の様子



⑥ ダム建設のための斜面掘削中の様子

⑦ 今見返せば「ああすればよかった」「もっとこうしておけば」と反省も多々あるという

ただこれだけ大規模なダムですから、付随する問題も後からいろいろ出てくるので、それに対処する予算を確保しなければなりません。そのための費用捻出に苦労したのを覚えています。当時私は26歳で、結婚したばかりだったのですが、徹夜続きで3日に1度しか官舎に帰れない時もありました」

若い技官であった八木澤さん、佐藤さんは、この現場で先輩たちからさまざまなことを学んだ。先輩の一人が、吉永格文さんだ。

吉永さんは、昭和53年4月に調査設計課長として着任し、ダムの完成後の昭和59年3月までを川治ダム工事事務所で過ごした。以前にも大きなダムの現場を幾つも経験していた吉永さんは、「異動するときに、もう図面はできていると言われて来たのですが、できてるなんてもんじゃなかったです。全部見直して書き直すところから始めました」と話す。結局、図面が不足しており、施工に追われるように急いで書く日々だった。

水源地域対策特別措置法の適用第1号となった、大規模ダム

川治ダムは昭和43年4月に調査事務所を開設。昭和45年4月には工事事務所を開設し、昭和48年9月に補償基準が妥結、翌年1月には本体工事に着工した。比較的早期に地権者からの理解を得ることができたといえる。

ダムを建設すれば、必ず水没する地域が出てくる。何

より大切なことは「地域のコミュニティを保ったまま生活再建をすること」と、3人は強調する。そのため、水没地にあたる集落をそのまま移転する「ずり上がり方式」で、川の上流に代替地を整備。河川の砂利を盛って造成したため、固く沈下しにくい土地にすることができた。

「昭和49年7月には、前年施行された『水源地域対策特別措置法』の適用を受け、それにより生活再建、地域居住計画、生活基盤などの整備を行うことができました。代替地の上下水道などのインフラや学校、公民館などの整備もダムの補償事業としてできたのです」と八木澤さんは説明する。

吉永さんによれば、それより以前のダムは、水没する地域の人々の生活再建について展望を示すことが難しかったという。

そのほか「蘭原ダムは、住民の大反対にあったことで知られています。私は川治に来る前に蘭原ダムにいたのですが、最初期の反対の大きさのわりには、住民とよく対話をしたことで早期に完成に至りました。ダムの場所や規模、社会の状況にもよるので、どこでも同じような補償というわけにはいきません。地元の人々と十分コミュニケーションをとり、理解を得ることの大切さを痛感していました」(吉永さん)

その考えは所内にも浸透し、皆が協力して地域の人々とのコミュニケーションに努めることになった。吉永さんも率先して地元に出向き、地域の人々とコミュニケー



⑧ ダム完成後の集合写真。前列中央で書類を手にしているのが吉永さん



⑨ ダム堤体内の管理用通路は、年中ひんやりとしている

⑫ ダムの右岸に立つ資料館には、大型の模型が



10

⑩ ダムの上流にある代替地を上空から望む



11

⑪ 資料館3階からはダム湖(八汐湖)が見渡せる。水陸両用バスでの観光も行われ多くの人が訪れている



12

ションをとった。行政のバックアップは大きく、地元の有力者が協力してくれ、村長がフォローしてくれた。

「骨材プラントで発生する泥土を使って陶器を作ることができたんです。これも村長とよく話し、地域の振興に役立ててもらおうと、地元の幼稚園や小学校、老人クラブなどで、私が講師になって陶芸講座をしました。窯も作ってね。職員も皆、快く手を貸してくれました」(吉永さん)

治水・利水の両面から、 ダムの弾力的な運用が求められる

川治ダムはアーチ式ダムといっても、兩岸の角度に合わせた放物線を描く放物線アーチダムである。部分的に岩盤がよくない箇所もあり苦労したそうだ。

放物線アーチダムはポイントによってかかる負荷が違うため難しい。しかし、「非常に測量を細かくして、目違いがなくきれいにできた」「ゲートの巻揚機も下部に設置し、天端をフラットにした。下流から見るときれいでしょ？」と吉永さんは胸を張る。

ダム建設の途中で、川治ダムと五十里ダムの間の山を通る野岩鉄道(会津鬼怒川線)のトンネルから湧水が出るというので、調査と対策にも奔走した。「調査なんかも惜みずどんどんやりました。工務課は、お金のことは私に言ってこなかったからね」と言う吉永さんに、「そのお金を工務課は苦労して捻出したんですよ」と佐藤さんは苦笑い。その湧水は、野岩鉄道の側溝から集落の水

路に流し、地元の防火用水にも活用している。

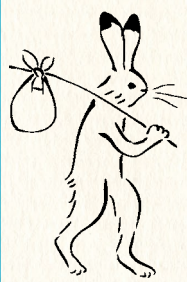
「吉永さんはいつ見かけても忙しそうだった」「でもいつも楽しそうだった」と八木澤さん、佐藤さんが言うのに対し、「ばーっと突っ走っちゃうからね。それを周りがなんとかしてくれるんだ」と吉永さんは笑う。

「まだ若い、ダム建設をやったことがない人たちに、自分の手で造るさまざまな段階を学んでもらえたのはとてもよかったと思います。私は好き勝手やっていましたが、八木澤さんも佐藤さんも上手にフォローしてくれました。小難しいことを話しても翻訳してくれたりね。彼らのような若い人がよく働いてくれると事務所はうまくいくんです」(吉永さん)

近年の豪雨は雨の降り方が以前とは違ってきている。いかに空き容量を増やすか。また来年はオリンピックもあり、利水のためにも貯水量を増やすことが求められる。これからのダムの課題は、少しでも多く貯められるように弾力的運用することだと3人は口をそろえる。

「私の個人的な意見書はできてるんだけどね」と吉永さん。ダムに対する熱意は、引退した今でも変わらない。

実際に現場を歩いて各所を見て回ると、「よくやった」という感慨よりも「もっとこうしたらよかった」「ここがうまくいかなかった」と反省の方が多い吉永さん。「今設計したのもっとうまくできると思うんだよねえ」と、いつまでもダムを見上げる吉永さんを、後輩の2人は見守っていた。



日本橋を取り巻く町々 多彩な“顔”を持っていた 江戸の中心地

江戸時代、東海道などの街道に設けられたのが宿場です。
旅人を迎え送り出した宿場の古今の様子を、
関東地方の各地に訪ねるシリーズ。
第1回は街道の起点となった
日本橋と周囲の町々を紹介します。

日本橋中央にある日本国道路元標。
道路の起点を表す。
1972(昭和47)年に橋の
中央に埋め込まれた



歌川広重の「東都大伝馬街繁栄之図」(部分)。
室町から大伝馬町にかけては、江戸屈指の繁華街だった
(画像提供: 国立国会図書館デジタルコレクション)

宿場には多くの機能があった

江戸時代に整備された諸制度で、とりわけ有名なのが五街道です。東海道、中山道、日光街道、奥州街道、甲州街道。他にも各地を結ぶ脇街道が整備され多くの旅人が行き交いました。街道に開設されたのが宿場です。宿場には多くの機能がありました。そこには、武士や公家が泊まる本陣、脇本陣、一般人が泊まる旅籠、居酒屋、商店などのほか、輸送のための馬なども用意されていたのです。

これらの街道の起点となったのが日本橋。江戸から明治にかけて流行った俗謡「お江戸日本橋」の一番では、「お江戸日本橋七つ立ち」と旅人の早朝(七つは午前4時頃)の出発の様子が歌われています。初代の日本橋が架けられたのは1603(慶長8)年のこと。以来、何度となく架け替えられ、現在の石造2連アーチ橋は20代目です。橋の中央には国道の起点であることを示す道路元標が埋められています。

日本橋地域には呉服屋から 牢屋敷まで揃っていた

日本橋周囲の町々では江戸、東京の中心地として多彩な活動が繰り広げられてきました。有名なのは商業の町としてです。三越(現 三越伊勢丹)の前身である呉服屋「越後屋」が江戸本町一丁目に開業したのが1673(延宝元)年。初の正札

販売を武器として発展。10年後に現在地に移転しました。周囲には商店が立ち並び、例えば、大伝馬町には木綿などの問屋や薬屋、商店が軒を連ねました。また、大伝馬町一帯は旅籠が多く集まった地区でもありました。通旅籠町と呼ばれたこともあるといわれています。観光や商用などで江戸にきた人が利用していたのでしょう。

日本橋は魚市場の町でもありました。江戸時代初期から日本橋川の日本橋～江戸橋周辺で江戸前の魚の取引が行われていました。関東大震災で魚市場が築地に移転するまで、日本橋は長く江戸・東京の台所だったのです。

食の次は娯楽。人形町にあったのが江戸三座のうちの中村座、市村座。他にもあやつり人形小屋や寄席などの娯楽施設が人々を喜ばせました。寄席の人形町末広は1970(昭和45)年まで開いていました。人形町には吉原遊郭もありました。1657(明暦3)年の大火で浅草に移転するまで約40年間営業していたのです。

日本橋は行政の町でもありました。現在の十思公園のところにあったのが伝馬町牢屋敷。吉田松陰が処刑された地としても有名です。金貨を鑄造、鑑定する金座もありました。その跡地にあるのが日本銀行です。

このように日本橋地域はさまざまな“顔”を持っており、各地の宿場の先輩としての内容を持つ町でもあったのです。



日本橋川に架かる日本橋。橋は何度も架け替えられており、現在の橋は20代目である



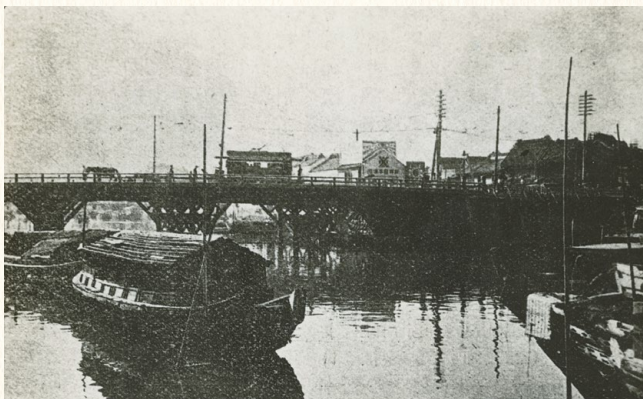
日本橋脇にある魚市場発祥の地を示す碑。江戸時代から関東大震災まで江戸・東京の台所だった



あやつり人形小屋があった人形町に立つモニュメント。あやつり人形のバネが鯨ヒゲであることがモチーフになっている



十思公園。江戸時代には牢屋敷があり処刑も行われた。鐘楼の鐘は時を告げ、鐘の音を合図に処刑も行われた



1906年(明治39)年頃の日本橋。馬車や人力車の普及に伴い橋は平坦な造りになっている(写真提供:中央区立京橋図書館)



中央通り室町界隈。三越などの老舗が立ち並び、商業の中心地として賑わってきた



日本銀行本店本館。1896(明治29)年に完成。設計は東京駅などを手がけた辰野金吾。国の重要文化財である



横浜の震災復興に向けて造られた

今回ご紹介する土木遺産は、神奈川県横浜市にある元町・山手地区の震災復興施設群です。この施設群は打越橋、櫻道橋、西の橋、谷戸橋と山手隧道の5つの土木施設からなり、関東大震災の復興事業の一環として造られました。

1923(大正12)年9月1日に発生した関東大震災は神奈川県南部を震源とし、マグニチュード7.9(震度7)を観測した大災害でした。各地で火災が発生したことにより被害は拡大、死者・行方不明者は約10万5,000人に上りました。多くの建物は倒壊、焼失し、橋にも被害が及びます。当時横浜市が管理していた254橋のうち木橋はほとんど焼失。鉄橋も床版などの木造部分が焼け落ちたり、橋台や橋脚が傾斜する被害を受けました。これにより道が遮断され、火から逃げる人々の避難をはばむ結果となりました。

震災後、内務省復興局と横浜市が総力を挙げて取り組んだのが土木施設群の新設・改築です。綿密な地質調査が行われ、震災の教訓をもとに耐震・耐火構造の設計が

なされます。橋台や橋脚は不同沈下が起こらないよう橋台の底版を広くする工夫がされました。また構造面の工夫だけでなく、外国人居留地の存在などもあり、近代的なデザインが施されました。震災の反省を生かした橋の建設は、その後の土木技術に大きく貢献しています。

横浜らしさを意識して設計される

打越橋は、上路式2ヒンジ鋼ランガー橋で、橋長38.4m。横浜市の震災復興橋梁として建設、1928(昭和3)年に竣工しました。山手外国人居留地の地境に架かることから、デザインにもこだわりが見られます。アーチリブはカーブが急で、両端に向かうほど幅が狭くなっており、リブのカーブがより鋭く見えるのが特徴的。朱の色もまぶしく、ランドマーク的な存在となっています。

山手隧道は、本牧方面と元町方面をつなぐ全長219m、幅員10.9mのトンネルです。内務省復興局の設計により、1928(昭和3)年に開通しました。当時の最新技術である大断面掘削が採用された初期の隧道で、戦前の隧道では最大規模の幅員を誇ります。櫻道橋の整備と一体と



関東の土木遺産 第38回

元町・山手地区の

震災復興施設群

神奈川県

土木学会では現存する貴重な土木構造物を調査し、「日本の近代土木遺産」として発表しています。



それらの土木遺産の中でも特に価値があるとされる選奨土木遺産。第38回は神奈川県横浜市にある元町・山手地区の震災復興施設群です。

打越橋。橋の奥には横浜ランドマークタワーが見える



櫻道橋(手前)と山手隧道(奥)。一体感のある造りが景観になじむ

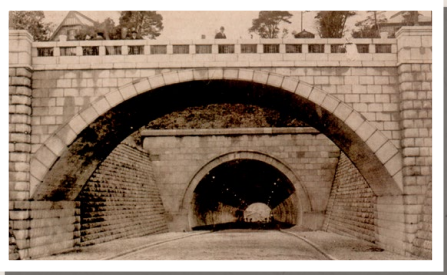


なって、横浜市内の復興事業の中で最大級の規模となりました。

櫻道橋は上路式鉄筋コンクリートアーチ橋で、橋長14.8m。内務省復興局の設計により建設され、1928(昭和3)年に竣工しました。橋名は、この橋上を通る街路が「櫻道」と呼ばれることに由来します。櫻道橋は山手隧道の建設に際し、櫻道が分断されないよう建設されました。橋の形状が緩やかなカーブの扁平アーチになっていることから、すっきりとした印象が感じられます。山手隧道も櫻道橋も表面に化粧張りが施されており、一体感のある造りになっています。

西の橋は上路式2ヒンジ鋼アーチ橋で、橋長32.8m。内務省復興局の設計で、1926(大正15)年に竣工しました。復興局が施工した鋼橋の復興橋梁30橋の一つです。

谷戸橋は上路式3ヒンジ鋼アーチ橋で、橋長は29m。横浜市土木局の設計で1927(昭和2)年に竣工しました。西の橋と谷戸橋は横浜港の整備にあたり中村川に架けられました。谷戸橋の親柱には、幾何学模様や直線的なデザインであるアール・デコ様式の意匠が見て取れ、復興の中でも横浜らしさを意識したことが感じられます。



1928年3月に行われた山手隧道の開通式。
手前に見えるのが櫻道橋
『横浜近代史総合年表』より(横浜市中心図書館所蔵)

山手方面へ抜ける2車線道路として
使われている

西の橋。西の橋から
谷戸橋にかけて中村
川沿いに元町ショッ
ピングストリートが続く



崩落した旧谷戸橋
(横浜市中心図書館所蔵)



谷戸橋。
親柱はアール・デコ様式の直線的なデザインが印象的



これまでも、これからも 時代や生活の変化とともに

元町・山手地区の震災復興施設群は平成27(2015)年に選奨土木遺産に認定されました。土木学会は選奨理由を「横浜の都市形成において重要な役割を担い、設計・意匠等最先端の土木技術が取り入れられ、歴史的構造物としても貴重な土木遺産」であると述べています。これについて、横浜市道路局の本橋康武さんは次のように話します。

「同施設群は、再びの災害に耐えられるよう耐震・耐火構造で造られただけでなく、近代的な意匠も取り入れられ、土木技術の大きな発展につながりました。また、モータリゼーションによる市電の廃止や高速道路の建設など都市の変遷の中でも、現在まで架け替えが行われることなく、およそ1世紀にわたって市民の生活を支えてきました。横浜の都市形成において特に重要な役割を担ってきた同施設群を、今後も歴史的構造物として後世に残せるよう保全に努めていきたい」

横浜市が推進する「歴史を生かしたまちづくり」においても保全対象に認定されている同施設群。これからも横浜の人々の生活に寄り添い続けることでしょう。

会員のひろば

このページは
会員の皆さまの
投稿によるページです



日本代表を応援する田んぼアート
(埼玉県行田市 古代蓮の里)

筆者の高校時代。北関東大会
(埼玉県と群馬県での地区代表
決定戦)を制し、チームメンバー
と記念撮影



ラグビーフットボール との出会い



T・Y

盛り上がるワールドカップ

ラグビーワールドカップ(第9回)日本大会が9月20日開幕しました。

1987年に第1回大会が開催され、4年おきに世界から選ばれた代表20カ国が、世界の頂点を目指して戦う大会で、夏季オリンピック、サッカーのワールドカップと併せて世界の3大スポーツイベントといわれています。

日本は、現在世界ランク8位で「ONETEAM」を掲げ、ベスト8を目標に第1戦はロシアと戦い30対10で勝利し、幸先の良いスタートを切りました。9月28日(土)には、アイルランド(2位)戦が行われ19対12で奇跡越えの勝利を収め、日本中に感動を与えてくれました。選手インタビューでは、勝因を「死ぬほど練習したから」、「勝つという強い気持ちがあった」という選手皆が勝利することを分かっていたように感じました。10月5日(土)には、サモア(15位)戦が行われ38対19で快勝し、8強に王手がかかり、大いに盛り上がりを見せていますので、ぜひ頂点を目指してほしいと願っております。

私がラグビーと出会ったのは、今から半世紀も前で(1967年)、世間ではほとんど知られていないスポーツ競技であったと思います。

ラグビーのルーツは、1823年イングランドのラグビー校でフットボールの試合中突然少年がボール持って走り出し、このことがきっかけで持って走るスタイルが浸透し、

ラグビーというスポーツが出来上がっていったといわれています。日本にラグビーが入ってきたのが1874年で、1920年代に日本のラグビーが定着していったようです。

私にとっても例外なく全くの未知の分野でありましたが、入学先がラグビーでは全国大会に出場するほど強かったこと、これから社会に出ていくために自身を鍛えるということで入部したと記憶しております。

当時を思い起こすに、現代とでは練習・指導方法も大きく異なると思いますが、今風でいえば「超」が付く、想像できないほど過酷なものでしたし、耐え抜くことが修練の場であり、心身を鍛えるというような、ある意味での根性を全面に押し出す感じだったと述懐しているところです。全国大会(あこがれの花園ラグビー場)に出場できたことがよい思い出であったと思いますし、その後の人生において大いにサポートを受けてきたということも事実であったろうと思います。時に試合観戦に足を運びますが、今なき青春を取り戻しに(?)大いにエネルギーをもらっているところです。

これからの日本での発展を期待

さて、ラグビーは当時と現代では試合運びやルール等大きく変貌しています。一つには、当時は試合中や練習中に水を口にすることはなかったということです。ただ、試合中一時的な打撲等で痛みを堪えている時など「魔法のヤカン」が出てきて、水を掛けてもらおうと不思議にファイトが出たものでした。水を飲むと血液の濃度が薄くなり疲労回復が遅れる(先輩からの伝承)。もう一つは、我慢=忍耐力を養うなど現代とは全く異なる論理が通っていました。今日では、試合中にウォーターブレイク(プレイヤーの安全確保=給水)が設けられています。

それから、ラグビーの得点ですが、現代ではトライで5点、コンバージョンゴール2点、ペナルティゴール・ドロップゴール各3点となっておりますが、当時はトライとペナルティゴールは同得点(3点)で、重大な反則については規律面が厳しく問われていたのではないのでしょうか。また、選手交代は認められず、故障等で退いた場合は、人数が少ない中での試合を強いられました。現代では登録メンバーは、故障等に関係なく交代できますが、当時は多少のことでは、試合を続行(気づかず歯が欠けていた)していました。

さらには、近年ではラグビーの質やゲームプランなどが大きく変わり、FWは大型化(激しいコンタクトに耐える屈強な体・平均体重110kg以上)し、BKでは早い展開でのパス回し、オフロードパス(倒れながらの片手でのパス)やキックパス(遠くへのパス代わりにキックを使う)など、当時では想像もできない進化を遂げています。いず

れにしても、半世紀もたちますと何事においても世の中大きく変貌を遂げるようなことが、必然的に起きているのではないのでしょうか。

それから、ラグビーが日本ではメジャーにならない理由として、ルールが難しく分かりづらい、なじめないなどといわれていますが、重大な反則などに対しても明確なジャッジがないので、最近では反則を回避するためにレフリーとその状態を確認しながらコミュニケーションをとり、分かりやすいゲームを目指しているようであります。

今回のワールドカップを機に、日本ラグビー界の歴史が塗り代わり、ますますの発展を遂げることを期待しているところです。

私自身、今日においても熱いものを感じ

ますし、ノーサイドの精神も心地よいものです。これらはこれからも永遠に生き続けていくことだろうと思います。

(文中のデータは令和元年10月9日現在のものです)



熊谷ラグビー場でW杯を
観戦(ジョージアvsウルグ
アイ戦)

会 員 情 報

令和元年8月1日～
50音順・敬称略

お悔やみ申し上げます 6名の方々に心からご冥福をお祈り申し上げます。

氏名	逝去年月	建設省(現国土交通省)退職時職名
高橋 達雄	平成 31 年 2 月	総務部 契約課長
寺田 斐夫	令和元年 8 月	北陸 局長
佐藤 睦雄	令和元年 9 月	常陸海浜 事務所長

氏名	逝去年月	建設省(現国土交通省)退職時職名
飯田 俊雄	令和元年 9 月	江戸川 技官
鈴木 茂夫	令和元年 9 月	北首都 出張所長
原 俊祐	令和元年 9 月	河川部 水政調整官

神奈川支部 移転のお知らせ

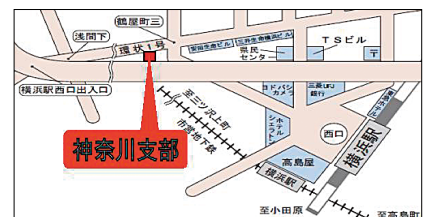
(一社) 関東地域づくり協会 神奈川支部は、下記へ移転しました。

〒221-0835

神奈川県横浜市神奈川区鶴屋町3-32-13 第2安田ビル4階

Tel : 045-311-1401 Fax : 045-311-1404

*電話番号は変更ありません。



編集委員会だより

2019年11月

食

欲の秋です。庶民には松茸は高値でなかなか手が出せませんが、庶民の味サシマも今年は不漁で店先でもあまり見かけません。豊漁になるのを願うばかりです。秋は行楽の季節でもあります。温泉や紅葉狩りなどは是非出かけてみたいものです。

秋は台風シーズンでもあります。今年は9、10月に台風15、19、21号が関東へ上陸・接近し甚大な被害をもたらしました。19号では、大雨特別警報が半日で13都県に発せられ、テレビの報道等でも「命を守る行動を取ってください」と繰り返し伝えられていました。関東・長野や東北地方の多くの河川で堤防の決壊や越水による氾濫、土砂崩れ等が発生し、多くの尊い人命と家屋・財産が奪われました。

地球温暖化により気候が激変し、今まで経験したことのない被害が今後も発生すると想定されます。ひとりひとりが自分の住んでいる地域の特性を確認し、早めに躊躇せず避難する等「命を守る行動」がとれるようにしておきたいものです。

(編集委員 A・N)

編集委員

[関東地域づくり協会]

澤田晋
鈴木雄司
堤盛良
中村一夫
野橋明彦
前田隆徳

[会員]

望月美知秋 ((株) 日水コン)
田中良彰 (大成建設 (株))

ピックアップ

第16回

関東の道の駅

地域の人々が集い 生き生きと 活動する場に



道の駅
両神温泉薬師の湯



県道37号に面する、小鹿野町の道の駅「両神温泉薬師の湯」

道の駅「両神温泉薬師の湯」は町営の日帰り温泉施設を中心に、地域資源活用センター、農林産物直売所、バスターミナルなどを併設。小鹿野町の地域福祉の拠点として、また高齢者を中心とする町民が集い活動する場として位置づけられている道の駅「両神温泉薬師の湯」の取り組みを紹介します。

地域の高齢者たちの交流の場

平成11年に開駅した道の駅「^{りようかみ}両神^{やくし}温泉薬師の湯」は山登りや季節の花々、山の幸を楽しみに多くの観光客が訪れる、小鹿野町の中心部にあり、県道37号に面しています。

この「両神温泉薬師の湯」最大の特徴は、町営の日帰り温泉施設です。一日600円の入浴料が町民ならば半額とあって、地元の高齢者たちは誘い合って一日をこの道の駅で過ごすことも珍しくないようです。大広間ではカラオケ設備も貸し出してあり、舞台で大いに歌い、交流を楽しむ姿も。

「両神地域は溪谷で集落が分断されており、交通の便もよいとはいえません。そのため、道の駅に町営バスのターミナルを設け、高齢者の移動の手段確保にも努めています」と小鹿野町おもてなし課の宮本拓さんは話します。

体験施設と直売所が 活動と生きがい創出の拠点に

「小鹿野町では早くから保険・医療・福祉に力を入れてきました。この道の駅には、高齢者が生き生きと活動できる拠点

という目的もあるのです」(宮本さん)

高齢者がそれぞれの経験を生かせる場となるよう設けられた地域資源活用センターは、打ちたてのそばを食べられる食事処として、またそば打ちやこんにゃくづくりを教える体験施設として、地域の人々が運営に力を発揮しています。農林産物直売所も、地域の人々の力なくしては成り立たない施設です。地域の農家などで生産する特産のきゅうりをはじめとした季節の野菜に加え、花木、こんにゃくやジャムなどの加工食品とさまざまな品物が並び、観光客だけでなく地域のスーパーマーケット代わりに利用されています。

また、デイケアなどを行う高齢者生活福祉センターや、極寒期などのための高齢者用一時入居施設も併設。行き交う人々の気配が感じられる道の駅は、高齢者が孤立しない環境づくりにも役立っています。

これらの取り組みにより「両神温泉薬師の湯」は平成28年度の住民サービス部門モデル「道の駅」に選定されました。開駅から約20年。「今後も人々の憩いの中心となる温泉を維持していきたい」と宮本さんは語ってくれました。



高齢者生活福祉センターや独居者用の住宅を併設し、孤立しない町づくりに生かしている



小鹿野町おもてなし課の高野好幸さん(右)と宮本拓さん(中央)。道の駅両神温泉薬師の湯を管理する磯田さん(左)。やはり一番のおすすめは日帰り温泉。「ソフトクリームもおいしいんですよ!」と宮本さん

直売所では、地域の生産者から持ち込まれる野菜や加工食品を販売。店舗の少ない小鹿野町ではスーパーマーケット代わりに利用されている



地域資源活用センターで働くのは地元の人たち。毎日そばを打って提供するほか、そば打ち体験も行う



自慢の日帰り温泉施設は600円。町民は半額で利用できるため丸一日この道の駅で過ごす人も多い